

## 学位論文要旨

学位授与申請者

奥矢 恵

題目：富士山における山小屋建築の原初形態とその変容に関する史的研究

- 吉田口登山道の石室を中心として -

本論文は、富士山における山小屋建築、なかでも、近世から現代に至るまで、最も多くの登山者を迎えてきた吉田口登山道の石室に着目して、その原初形態と変容の実相について検討した。加えて、近世、登拝に利用された主たる登山道と頂上の山小屋を比較し、富士山の山小屋建築の基盤的な形態を規定した諸相と、それらの連関によって山小屋群が形成した富士山の山岳景観の特質について検討した。

### 第1章 序論

本章では、本論の背景と目的、既往研究の概要と本論の位置づけ、研究の方法と資料、論文の構成及び概要について述べた。

### 第2章 山小屋建築の成立過程とその形態

本章では、近世における吉田口登山道の石室を中心に、山小屋建築の原初形態と成立過程について検討した。

山小屋は、山内の祠堂等の付属屋、あるいは祠堂そのものであり、居間や水場を付加して発展した。「草山・木山」には板小屋の茶屋が、「焼山」には石室の泊まり屋が設けられ、石室には石窟型と建屋型があり、その原初形態は修行の場であった自然の石窟にあることを指摘した。建屋型の石室は板小屋を基盤に、噴石を屋根や壁の周囲に積み上げ、苛烈な山岳の自然環境に対する防御性を発展させて焼山に成立したことを見出した。

### 第3章 山小屋建築の近代化の萌芽

本章では、明治・大正期における吉田口登山道の石室を対象に、近代化への契機となった事象とそれらによる形態の変化について検討した。

近代化は八合目に芽吹き、明治40年に近代建築としての山小屋が創設され、関東大震災に前後して洋小屋が導入されたことを明らかにした。これらは、科学・技術の専門家、近世に山内の諸権利を有した御師とは立場や発想を異にする者らによって創出されたことを指摘した。一方で、大正末までに、その他の石室は小屋敷とともに規模を拡大

しつつも、新たな山小屋に倣うことはなく、概ねは旧来の形態を保ったことを把握した。

#### 第4章 山小屋建築の近代化の実相

本章では、富士スバルラインの開通によって富士登山の観光化が完遂した昭和39年までの吉田口登山道の石室を対象に、石室が遂げた近代化の実相について検討した。

富士山の国立公園指定によって、戦後にかけて石室は規模を拡大、多くのファサードには腰窓が設けられ、半数が石積みを除去して板壁に変更したことを明らかにした。さらに昭和20～30年代、五合目へのモータリゼーション導入を機に、半数以上の石室が建て替えや増改築を行い、開放性や利用上の自由度を高め、構法を複雑化したことを明らかにした。石室の近代化は、富士山の山小屋の代名詞「石室」を脱する様相をもった。

#### 第5章 山小屋建築を形成する諸相と山小屋群による山岳景観

本章では、山小屋の基盤的形態が形成された近世に立ち返り、吉田口登山道とともに、近世以前から登拝された大宮・村山口、須山口、須走口登山道と頂上を対象に、山小屋（茶屋・石室）の所有、山内における所在、形態、それらの連関について検討した。

ほとんどで草山・木山には茶屋（板小屋）が、焼山には石室が設けられ、4登山道の比較によって、石室は、方形の平面をもつ修験の拠点から間口を拡げ、より合理的な大衆の登拝拠点へと発展した可能性を指摘した。また、茶屋は各登山道の支配層の身分や麓集落の家屋に相応した形態をもつ一方、石室は全登山道で共通した形態をもち、焼山では石室群によって象徴性の高い山岳景観が形成されていたことを指摘した。

#### 第6章 結論

本章では、第2～5章までの各章で得られた結果を総括し、結論を述べた。

富士山において山小屋は、祠堂などの付属屋、あるいは祠堂そのものであったと考えられた。なかでも、焼山の石室は、修行の場であり避難所でもあった自然の石窟を原初形態とし、板小屋を噴石や溶岩で覆うようにして造られた。しかし、昭和の高度成長期までに、簡素で単純な架構をもった石室は複雑化し、開放化するよう近代化を遂げた。

富士山の山小屋の基盤形態は、自然環境、信仰形態、富士登拝を生業とする登山口集落とその支配層の性格、自然災害、資材調達等の連関のなかで形成された。

富士山の神聖性は、各々の登山口集落の形態が連続する草山・木山の茶屋に対して、焼山の風景と一体化し共通した形態をもつ石室群によって表徴された。石室は苛烈な自然環境に対する防御であり、最も神聖な領域における人工物の隠蔽でもあったが、自らのアイデンティティを脱する様相をもって変容したことが明らかとなった。